

大都市における有配偶女性の家事意識と家事遂行 — 現代女性の生活ストレスとネットワーク調査から —

1. はじめに
2. データ
3. 家事遂行と家事意識
4. 考察

永井 暁子*
石原 邦雄**

要 約

1993年12月東京都の調布市において、比較的若い年齢層の有配偶女性に対し、ライフストレスとソーシャルネットワークに注目し、郵送法による調査を行った。25～44歳の有配偶女性を抽出し、回収率は約50%（822票）であった。この論文はこの研究プロジェクトの最初の報告である。

回答者のうち、多くは子供をもった専業主婦であり、フルタイムで就労している女性は少なかった。子供のいない夫婦は子供のいる夫婦よりも家事をしない。しかし、子供をもたない若い夫はむしろ子供をもつ夫よりも家事を分担する。夫婦関係がより平等であることを示していると考えられる。妊娠・出産の後、多くの女性は専業主婦になる。乳幼児がいるライフステージでは、参加の程度の違いはあれ、多くの夫は子育てに参加する。しかし、そのほかの家事は育児ほど行わない。

妻役割にコミットしている妻は愛情を持って家事を行う傾向があり、また出来合いの惣菜はほとんど利用しない。母役割を重要視している妻は家事を義務として考え、他の者よりも家事を多く行う傾向がある。一方、主婦役割にコミットしている妻は家事を義務と考え、プライド・愛情を持って家事を行う傾向がある。

要するに、子供の存在が多くの妻を市場労働から引き離し、また夫婦関係を変えてしまうのである。

1. はじめに

今日、家族生活のイメージが大きく変わりつつ

あるといわれている。キャリア志向の女性、DINKS等が話題にのぼったことは記憶に新しい。一方、男性の家事、とりわけ、育児参加が推奨される場面をマスコミなどで見受けることも珍しく

* 東京都立大学大学院

** 東京都立大学 人文学部

ない。また、一般にいわれる女性の変化の中には、女性が持つ複数の役割における重要度の主観的序列づけの変化も含まれる。これらは単に家族内の分業形態の変化の兆しだけでなく、家族イメージの変化の兆しを意味すると考えられる。本論では家族生活を映し出すものとして家事に注目し、都市における有配偶女性像の一端をかいまみることにする。

家事は、第一に家族生活を維持する労働であり、その性格上ライフステージや妻の就労により影響をうける。一方、ライフステージや妻の就労は、時間や労働量というような実質的要因として家事に影響するだけではなく、ライフステージにおける夫婦関係、妻の就労の奥にある妻や夫の考え方を含んでいると思われる。ここでは妻の家事意識、家事遂行、夫婦間の家事分担、妻の社会的役割の主観的重要性に注目しながら、これらの点について考察していく。

以下、2章では調布市で行った調査の概要と回答者の属性を、3章では調査をもとに世帯での家事遂行状況、家事についての妻の意識、夫の家事参加の分析を取り上げる。最後に4章では分析結果についての考察を行う。

2. データ

(1) 調査のねらい

今回の調査は共同研究「大都市の地域経済構造の変化に対応した環境の保全創造に関する総合的研究」の一環として実施された、「現代女性の生活ストレスとネットワーク調査」である。この調査の具体的な関心は以下の4点である。まず、現代女性の日常生活として、とくに家庭、職業、さらにサークル活動や地域活動などの社会活動にどのように関わり、そのなかでどの活動を最も重要視しているのか。第2に家庭生活の様子はどのようなものであるのか。本研究ではとくに夫婦関係に注目した。夫は家事・育児に参加したり、良き理解者として妻を支えているのか。第3に女性は家庭外のどんな人々と交流をもち、そうした人々によってどのように支えられているのか。最後に

そうした生活の中で女性はどのようなストレスを経験し、どのような心身の状態にあるのか。

これらの問題関心を調査に反映させるために、育児、仕事などにおいて、生活ストレスの多い年齢であると思われる25～44歳の女性を調査対象者とした。調査地は東京都内でサンプリングにおいて約2000人を抽出できる程度の人口規模をもち、かつ大都市的な高学歴・ホワイトカラー層の比較的多い住宅地区と思われる市の中から、調査実施の便宜も考慮して調布市を選定した。

(2) 調査地の概要

今回調査を行った調布市は東京都のほぼ中央にあり、都心へ20kmの距離にある。市の東は世田谷区、北は三鷹市、小金井市、西は府中市、南は狛江市および多摩川をはさんで稲城市、神奈川県川崎市に接している。

調布市は昭和30年に調布町と神代町が合併し市となった(調布市、1994)。当初約4万5千人であった人口は、昭和30年代後半から40年代前半にかけての、大規模団地への入居の開始や農地から宅地への転用によって、昭和39年には10万人を超えた。その後、昭和50年代には人口急増も一段落し、現在は約19万6千人である(平成6年1月1日現在)。

年齢別人口構成をみると20歳代前半にピークがあり、その理由として就学・就職により転入してくるものが多いからだと思われる。住民の転出入では、平成5年1年間で人口の1割が入れ替わっていることも、同様の理由からであろう。住宅の面積をみても1戸あたり56.1㎡と非常に小さく、ワンルームマンションなどが多いことを反映している。また借家率も61%と高い。

世帯の主な働き手の通勤時間は60分前後に集中しており、調布市は主にベッドタウンであることがうかがえるが、最近では市内での就業者数が増加している。産業別には第3次産業の就業者が多い。

(3) 調査方法

調査対象者として調布市の選挙人名簿より、25歳以上44歳以下の有配偶と思われる女性を無作為に抽出した。サンプリングの結果、1949～1953年

生まれ(40～44歳)512名、1954～1958年生まれ(35～39歳)432名、1959～1963年生まれ(30歳～34歳)489名(うち親同居78名)、1964～1968年(25歳～29歳)407名(うち親同居と思われる者126名)の1840名が選ばれた。今回の調査は有配偶女性を対象としたものであるが、親と同居していると思われる者の中には、とくに若い年齢層では配偶者とみなした男性が兄弟であり、対象者は実際には無配偶であるケースがおおいに考えられる。調布市の全人口について有配偶者の年齢別の親との同居率と比較すると、サンプリングした者の中では25歳から34歳にかけての層で親と同居しているとみられるものの比率が非常に高かった。サンプル全体の構成をそこで母集団での有配偶同居者の割合に近づけるように、一度抽出されたサンプルのうちさらに、1959～1963年生まれで親と同居しているもの78名の中から48名を、1964～1968年生まれで親と同居している126名から36名を無作為に抽出し、最終的には1720名が対象者に選ばれた。1993年12月に調査票を個別に郵送し同年12月中に返送してもらい回収した。回収の結果、35名は転居など宛先不明、42名は無配偶者であり非該当であったため、1643名が今回の調査の実質的な対象者数であった。回収票数は822票、従って回収率は50.0%である。以降の集計・分析にあたっては、職業・ライフステージについて完全に記入されていない票を除き、807名の調査票のみを用いている。

(4) 対象者の特性

①回答者と配偶者の年齢(表1)

回答者の年齢は20歳代後半16.4%、30歳代前半

表1 回答者と配偶者の年齢(%)

	回答者	配偶者
～24歳	—	0.4
25～29歳	16.4	8.3
30～34歳	27.1	23.3
35～39歳	25.6	22.6
40～44歳	30.9	24.5
45歳～	—	20.9
合計	100.0	100.0

27.1%、30歳代後半25.6%、40歳代30.9%と20歳代は少なく40歳代が多かった。回答者の配偶者(夫)の年齢は20歳代前半0.4%、20歳代後半8.3%、30歳代前半23.3%、30歳代後半22.6%、40歳代前半24.5%、45歳以上20.9%と、全体的にやや回答者よりも高い年齢層に多くなっている。

②回答者と配偶者の最終学歴(表2)

回答者の最終学歴は中学2.9%、高校42.5%、短大・高専26.6%、大学以上27.9%、その他0.1%であった。配偶者の最終学歴は中学4.8%、高校28.8%、短大・高専3.4%、大学以上63.0%である。短大・高専卒業以上の者が回答者57.5%、配偶者で68.6%を占め高学歴である人が多いといえる。

表2 回答者と配偶者の最終学歴(%)

	回答者	配偶者
中学	2.9	4.8
高校	42.5	28.8
短大・高専	26.6	3.4
大学以上	27.9	63.0
その他	0.1	—
合計	100.0	100.0

③住居形態(表3)

賃貸のマンション・アパート45.6%、社宅・官舎・寮14.8%、一戸建て借家5.8%、買取りのマンション・公団12.6%、一戸建て持家21.2%であり、家を所有している世帯は3割強にとどまっている。

表3 住居形態(%)

賃貸マンション・アパート	45.6
社宅・官舎	14.8
一戸建て借家	5.8
買取りのマンション・公団	12.6
一戸建て持家	21.2
合計	100.0

④居住年数(表4)

現在の居住地に住んでいる年数が3年未満の者26.1%、3年以上5年未満の者18.6%、5年以上

10年未満の者30.4%であり、若い年齢層を対象としたため居住年数は短いものが多い。10年以上現在の居住地に住んでいるものは24.9%にすぎない。

表4 居住年数 (%)

3年未満	26.1
3年以上5年未満	18.6
5年以上10年未満	30.4
10年以上	24.9
合計	100.0

⑤回答者と配偶者の職業 (表5・表6)

回答者のうち約半数の51.8%が無職である。常勤で勤めている者は14.7%、パート・臨時19.7%、自営・自由業は10.6%、内職2.6%、その他の形態で働いている者は0.6%であった。いわゆる専業主婦が半数を占めている。

配偶者のうち約8割は常勤である。パート・臨

表5 回答者と配偶者の就労形態 (%)

	回答者	配偶者
無職	51.8	0.5
常勤	14.7	79.5
パート・臨時	19.7	1.0
自営・自由業	10.6	18.3
内職	2.6	—
その他	0.6	0.7
合計	100.0	100.0

表6 回答者と配偶者の職種 (%)

	回答者	配偶者
専門	29.6	23.9
管理	2.1	29.1
事務	34.2	18.2
販売	19.8	12.7
サービス	6.4	2.9
労務	4.1	7.7
その他	3.9	5.5
合計	100.0	100.0

(註) 現在職業についている者のみ集計

時で勤めている者は1.0%、自営・自由業は18.3%、その他の形態で働いている者は0.7%、0.5%が無職であった。

職種については現在職業についていると回答した者の中での割合を示した。回答者についての職種は専門と事務をあわせると6割強にのぼる。専門職についている者が29.6%、管理2.1%、事務34.2%、販売19.8%、サービス6.4%、労務4.1%、その他の職種の者が3.9%であった。

配偶者は専門職・管理職に就いている者が半数以上を占める。専門職についている者が23.9%、管理29.1%、事務18.2%、販売12.7%、サービス2.9%、労務7.7%、その他の職種の者が5.5%であった。

⑥回答者本人と世帯全体の年収 (表7・表8)

回答者の約半数が専業主婦であったことから推測されるように、回答者のうち38.9%は収入がない。税制上の被扶養者の範囲内である年収120万円未満の者は27.0%、120万円を超えるものは34.1%であった。年収が500万円を超えるものは10%にとどまっている。

回答者および配偶者、その他の収入を含めた世帯の年収は400万円未満4.3%、400万円以上600万

表7 回答者の年収 (%)

なし	38.9
—49万円	11.1
50—119	15.9
120—299	12.7
300—499	11.4
500—	10.0
合計	100.0

表8 世帯の年収 (%)

—399万円	4.3
400—599	19.1
600—799	29.4
800—999	20.4
1000—1499	21.7
1500—	5.2
合計	100.0

円未満19.1%、600万円以上800万円未満29.4%、800万円以上1000万円未満20.4%、1000万円以上1500万円未満21.7%、1500万円以上5.2%であった。低所得層も少ないが、高額所得の世帯も特に多いとはいえない。

⑦世帯構成 (表9)

回答者のみの世帯0.1%、回答者と配偶者の世帯は19.1%、それに子供を加えた世帯68.3%であり、核家族が大多数を占める。

親との同居は11.6% (回答者と夫と回答者の親の世帯0.4%、回答者・夫・子供・自分の親の世帯3.6%、回答者と夫の親のみの世帯0.4%、回答者・子・夫の親の世帯0.5%、回答者・夫・夫の親の世帯0.4%、回答者・夫・子・夫の親の世帯6.3%)と全体の1割ほどであった。

表9 世帯構成 (%)

回答者のみ	0.1
回答者・配偶者	19.1
回答者・配偶者・子供	68.3
回答者・子供	0.9
回答者・親	0.4
回答者・配偶者・親	0.8
回答者・子供・親	0.5
回答者・配偶者・子供・親	9.9
合計	100.0

⑧子の数とライフステージ (表10・表11・表12)

子供のいない世帯は19.4%、1人22.8%、2人44.9%、3人11.8%、4人以上1.1%で2人の世帯が約半数を占めている。

対象者を44歳以下に限定したため、子供がいる世帯の中で末子の年齢は8割以上が小学生以下で

あった。3歳未満の手のかかる時期の子供がいる世帯は25.0%、3歳以上6歳以下19.5%、7歳以上12歳以下22.4%、13歳以上13.6%であった。

回答者の就労形態の関係でみると、夫婦のみのステージの世帯では専業主婦は3割程度であり、常勤は4割近くにはのぼる。しかし乳児のいる世帯では8割近くが専業主婦となり、常勤の者は1割を割っている。末子が小学校に入る頃からパートにできるものがだんだんと増え、末子が中学生以上になると専業主婦は全ステージの中で最も少なくなる。常勤で働き続けようとする者は末子が3歳あたりのところで、復職あるいはなんらかの常勤の仕事に戻るようである。

⑨社会活動参加 (表13)

社会活動については自治会・町内会・婦人会、父母会・PTA役員、ボランティア活動、市民運

表10 子供の人数

0人	19.4
1人	22.8
2人	44.9
3人	11.8
4人以上	1.1
合計	100.0

表11 ライフステージ (%)

夫婦のみ	19.5
末子が乳児 (0-2歳)	25.0
末子が幼児 (3-6歳)	19.5
末子が小学生 (7-12歳)	22.4
末子が中学生以上 (13歳以上)	13.6

表12 ライフステージ別妻の就業形態 (%)

	専業主婦	自営・内職	パート	常勤	合計
夫婦のみ	29.9	14.0	19.8	36.3	100.0
末子乳児	76.2	11.9	2.0	9.9	100.0
末子幼児	67.8	13.6	3.4	15.3	100.0
末子小学生	49.2	11.6	27.6	11.6	100.0
末子中学生以上	24.6	19.1	39.1	17.3	100.0

自由度 12 $\chi^2=185.0$ $p<.001$

動・政治活動・生協活動・消費者グループ活動、宗教活動・教養講座・読書サークル、資格取得・技術取得の学習会、趣味・スポーツ・おけいごとと、その他の活動の10項目をあげ、過去1年間に参加したものの全てに○をつけてもらう複数回答の形態でたずねた。

他の質問項目に較べて無回答の者がいくぶん多かった。702名の回答からえられた情報の中では、過去1年間の社会活動への参加状況をみると、自治会・町内会・婦人会24.6%、父母会・PTA 役員39.3%、ボランティア活動5.8%、市民運動・政治活動4.1%、生協活動・消費者グループ活動31.3%、宗教活動6.1%、教養講座・読書サークル25.1%、資格取得・技術取得の学習会9.8%、趣味・スポーツ・おけいごとと46.7%、その他0.8%であった。8割以上の者がなんらかの活動に参加しており、何も参加していなかった者は18.4%にすぎない。

表13 社会活動の参加状況 (複数回答: %)

自治会・町内会・婦人会	24.6
父母会・PTA役員	39.3
ボランティア活動	5.8
市民運動・政治活動	4.1
生協活動・消費者グループ活動	31.3
宗教活動	6.1
教養講座・読書サークル	25.1
資格・技術取得の学習会	9.8
趣味・スポーツ・おけいごと	46.7
その他	0.8
どれにも参加しなかった	18.4

欠損値 105

3. 家事遂行と家事意識

(1) 世帯全体の家事遂行と妻の就労形態およびライフステージ

世帯全体の家事遂行は家族人数・乳幼児の有無・要介護者の有無・住宅条件などによって異なると同時に、担い手の入手可能な時間・労働力、能力の相違によって異なってくる。世帯で行われる家事はそれらの諸条件によって、行われる頻度が増減したり、外部化されることがある。ここでは頻度として差異の生じやすい「掃除」と「洗濯」を、外部化として「冷凍食品」と「できあいの惣菜」の利用をとりあげ、集計結果を表14にまとめた。

「掃除」は約半数の家で毎日行われている。

「ほとんど毎日」49.2%、「週3～5日」27.8%、「週1～2日」22.2%、「ほとんど行っていない」0.7%である。「洗濯」は幼い子供がいる世帯が多いこともあるからであろうか、「ほとんど毎日」が76.1%にものぼる。つづいて「週3～5日」16.7%、「週1～2日」7.1%、「ほとんど行っていない」0.1%となっている。

冷凍食品やできあいの惣菜は昨今スーパーやデパートの食品売場を賑わせているが、対象者の利用の頻度としてはそれほど多いものではなかった。「冷凍食品の利用」は「ほとんど毎日」2.7%、「週3～5日」18.9%、「週1～2日」42.5%、「ほとんど利用していない」35.9%である。「できあいの惣菜の利用」は冷凍食品に較べると、利用頻度はさらに少ない。「ほとんど毎日」1.1%、「週3～5日」6.7%、「週1～2日」33.8%、

表14 家事の頻度 (%)

	ほとんど 行っていない	週1～2日	週3～5日	ほとんど毎日	合計
掃除	0.7	22.2	27.8	49.2	100.0
洗濯	0.1	7.1	16.7	76.1	100.0
冷凍食品の利用	35.9	42.5	18.9	2.7	100.0
惣菜の利用	58.3	33.8	6.7	1.1	100.0

「ほとんど利用していない」世帯は58.3%にものぼる。

3世代家族は表9に示したように少なかったため、家事の主な担い手は妻であることが予想される。そこで妻の就労形態やライフステージと家事の関係について検討する。

ただし「洗濯」・「掃除」とも一週間ほとんど行わないとしている者は少なく、「冷凍食品」や「できあいの惣菜」をほとんど毎日利用している者は少なかったため、以降の分析では操作上、「洗濯」・「掃除」の項目は「ほとんどなし」と「週1～2日」を、「冷凍食品の利用」や「できあいの惣菜の利用」では「ほとんど毎日」と「週3～5日」をまとめた。

「掃除」を行う頻度は単純集計にみられたように、ほとんど毎日行っている世帯が多い。しかし自営・内職の世帯では毎日行っているのは51.4%、パートで勤めている回答者の世帯では35.3%、常勤の場合は15.9%と就労形態による違いがみられる(表15： $\chi^2=187.3$ 自由度6 $p<.001$)。

ライフステージに着目してみよう。夫婦のみの

世帯では毎日行う世帯が18.0%であるが、乳児のいる世帯では66.3%と著しく増え、それ以降は幼児のいる世帯61.0%、末子が小学生の世帯53.3%、末子が中学生以上39.1%の順に減少している(表16： $\chi^2=145.9$ 自由度8 $p<.001$)。

「洗濯」の頻度も就労形態、ライフステージとの関係において、「掃除」の頻度と同じ傾向がみられる。ただし常識的にみても、「掃除」よりは省略のしやすい項目ではないため、数字が示すようにも全体的には毎日行われるケースが多い。常勤の場合、毎日行う世帯は他の就労形態に較べて少なく、50%にとどまっている(表17： $\chi^2=91.6$ 自由度6 $p<.001$)。

次にライフステージ間の差異については、夫婦のみの世帯では毎日行う世帯は23.6%、乳児のいる世帯では92.6%、幼児のいる世帯85.6%、末子が小学生の世帯88.3%、末子が中学生以上85.5%である(表18： $\chi^2=310.2$ 自由度8 $p<.001$)。

「冷凍食品の利用」はどの世帯でも少ない。妻の就労形態による差もみられなかった(表19)。ライフステージ別では夫婦のみの世帯が12.1%と低く、ほとんど利用しない世帯は50%以上である。

表15 妻の就業形態別「掃除」の頻度 (%)

	週0-2日	週3-5日	週6-7日	合計
専業主婦	7.9	27.8	64.3	100.0
自営・内職	21.6	27.0	51.4	100.0
パート	32.4	32.4	35.2	100.0
常勤	60.2	23.9	15.9	100.0

欠損値=2 自由度 6 $\chi^2=187.3$ $p<.001$

表16 ライフステージ別「掃除」の頻度 (%)

	週0-2日	週3-5日	週6-7日	合計
夫婦のみ	54.5	27.6	18.0	100.0
末子乳児	9.4	24.3	66.3	100.0
末子幼児	15.3	23.7	61.0	100.0
末子小学生	16.7	30.0	53.3	100.0
末子中学生以上	23.6	37.3	39.1	100.0

欠損値=2 自由度 8 $\chi^2=145.9$ $p<.001$

表17 妻の就労形態別「洗濯」の頻度 (%)

	週0-2日	週3-5日	週6-7日	合計
専業主婦	3.8	10.5	85.7	100.0
自営・内職	5.4	17.1	77.5	100.0
パート	4.3	23.7	72.0	100.0
常勤	21.7	28.3	50.0	100.0

欠損値 = 1 自由度 6 $\chi^2=91.6$ $p<.001$

表18 ライフステージ別「洗濯」の頻度 (%)

	週0-2日	週3-5日	週6-7日	合計
夫婦のみ	28.6	47.8	23.6	100.0
末子乳児	1.0	6.4	92.6	100.0
末子幼児	3.4	11.0	85.6	100.0
末子小学生	2.2	9.4	88.4	100.0
末子中学生以上	2.7	11.8	85.5	100.0

欠損値 = 1 自由度 8 $\chi^2=310.2$ $p<.001$

表19 妻の就労形態別「冷凍食品の利用」 (%)

	週0日	週1-2日	週3-7日	合計
専業主婦	33.3	45.3	21.3	100.0
自営・内職	38.7	41.4	19.8	100.0
パート	33.1	41.0	25.9	100.0
常勤	44.2	36.2	19.6	100.0

欠損値 = 2 自由度 6

表20 ライフステージ別「冷凍食品の利用」の頻度 (%)

	週0日	週1-2日	週3-7日	合計
夫婦のみ	52.9	35.0	12.1	100.0
末子乳児	37.1	41.1	21.8	100.0
末子幼児	30.1	49.4	20.5	100.0
末子小学生	28.9	42.8	28.3	100.0
末子中学生以上	29.1	45.5	25.5	100.0

欠損値 = 2 自由度 8 $\chi^2=33.3$ $p<.001$

一方、その他のステージでは20%以上の世帯で週3日以上利用している(表20: $\chi^2=33.3$ 自由度8 $p<.001$)。

「できあいの惣菜の利用」も全体的に少ない。妻の就労形態・ライフステージによる差はみられ

なかった(表21・表22)。

(2) 夫の家事分担と妻の就労形態およびライフステージ

夫の家事分担は意識の面ではわかってきているといわれるものの、実際の行動となると他の調査

表21 妻の就労形態別「できあいの惣菜の利用」(%)

	週0日	週1-2日	週3-7日	合計
専業主婦	60.4	33.3	6.2	100.0
自営・内職	58.6	30.6	10.8	100.0
パート	57.6	35.3	7.2	100.0
常勤	52.6	36.5	11.0	100.0

欠損値=3 自由度 6

表22 ライフステージ別「できあいの惣菜の利用」頻度(%)

	週0日	週1-2日	週3-7日	合計
夫婦のみ	63.5	26.9	9.6	100.0
末子乳児	55.5	38.1	6.4	100.0
末子幼児	60.7	31.6	7.7	100.0
末子小学生	57.3	34.4	8.3	100.0
末子中学生以上	55.5	36.4	8.2	100.0

欠損値=3 自由度 8

表23 夫の家事参加(%)

	全く行わない	たまに行う	ときどき行う	しばしば行う	あてはまらない	合計
料理・あとかたづけ	40.2	35.7	13.3	10.8	—	100.0
風呂の準備・掃除	37.8	33.2	13.9	13.1	2.0	100.0
洗濯	75.3	16.7	3.9	4.1	—	100.0
掃除	56.1	30.7	7.5	5.7	—	100.0
ふとんのあげおろし	41.7	27.3	9.5	20.5	0.9	100.0
ゴミだし	46.5	24.6	8.2	20.8	—	100.0
子育て	12.2	23.9	28.1	35.8	19.5	100.0

を見てもそれほど夫が行っていない。その点を考慮し、一般的な「料理・あとかたづけ」、「掃除」、「洗濯」の他に、夫の家事分担の多いとされている「風呂の準備・掃除」、「ふとんのあげおろし」、「ゴミだし」、「育児」を含めた7項目について夫が行う割合をたずねた(表23)。

全体的にはどの項目においても夫の家事参加は少ない。「料理・あとかたづけ」を「全く行わない」夫は40.2%、「たまに行う」35.7%、「ときどき行う」13.3%、「しばしば行う」10.8%であった。

「風呂の準備・掃除」は他の調査において夫が参加することの多い項目である。この調査におい

ても他の項目に較べるとやや夫は行う傾向にある。「全く行わない」37.8%、「たまに行う」33.2%、「ときどき行う」13.9%、「しばしば行う」13.1%であった。

「洗濯」は家で行われている頻度は多いにもかかわらず、「全く行わない」夫が75.3%にものぼる。以下「たまに行う」4.1%であった。

「掃除」を「全く行わない」夫は56.1%、「たまに行う」30.7%、「ときどき行う」7.5%、「しばしば行う」5.7%であった。

「ふとんのあげおろし」もつぎの「ゴミだし」とともに他の調査で夫の家事参加の多い項目であ

る。「ふとんのあげおろし」を「全く行わない」夫は41.7%、「たまに行う」27.3%、「ときどき行う」9.5%、「しばしば行う」20.5%であった。

「ゴミだし」に関しては「全く行わない」46.5%、「たまに行う」24.6%、「ときどき行う」8.2%、「しばしば行う」20.8%であり、比較的行う夫が多いようである。

「子育て」は最も多くの夫が参加している項目である。「全く行わない」夫は12.2%にすぎず、「たまに行う」23.9%、「ときどき行う」28.1%、「しばしば行う」夫が35.8%にのぼる。あてはまらない世帯は19.5%であった。

洗濯・掃除は世帯で行われる頻度が高いわりに、行う夫は少ない。それに較べて「ふとんのあげおろし」・「ゴミすて」のように短時間でできる家事項目は夫によって行われる頻度が高い。家事項目によって、夫の参加の程度が異なっている。

次に妻の就労形態およびライフステージと夫の家事分担との関係について検討する。専業主婦の世帯が全体の半数を占めることを考慮しても、前述したように夫の家事分担の程度は非常に低かった。育児以外のどの項目においても「しばしば行う」夫は少なかったため、ライフステージ別、妻の就労形態別の検討にあたって、「しばしば行う」と「ときどき行う」をまとめている。妻の就業形態別では専業主婦、自営、パートの順で夫の参加の度合いは高くなる。妻が常勤の場合に他の就労形態と較べて著しく参加度が高くなっている。またライフステージ別では夫婦のみの世帯のみが際立って夫の参加の程度は高いようである。

「料理・あとかたづけ」において「ときどき行

う」・「しばしば行う」夫の割合は、妻が専業主婦、自営・パートの順に参加度が高くなり、さらに常勤の場合の43.5%にのぼる(表24： $x^2=54.5$ 自由度 6 $p<.001$)。

夫婦のみの世帯の場合、「料理・あとかたづけ」をときどきあるいはしばしば行う夫は40.8%と比較的多いが、それ以降のライフステージでは20%前後になり少なくなっている(表25： $x^2=39.4$ 自由度 8 $p<.001$)。

「風呂の準備・掃除」においても、夫の参加は妻が常勤の場合「ときどき行う」・「しばしば行う」が約半数を占める(表26： $x^2=46.4$ 自由度 6 $p<.001$)。

夫婦のみの世帯では半数以上の夫が「風呂の準備・掃除」をときどきあるいはしばしば行うのにたいし、乳幼児のいる世帯では3割弱、末子が小学生以上の世帯になると2割をわっている(表27： $x^2=68.0$ 自由度 8 $p<.001$)。

「洗濯」を「ときどき行う」・「しばしば行う」夫は、妻が常勤の場合でも23.7%にとどまってい

表24 妻の就労形態別 夫の「料理・あとかたづけ」(%)

	まったく	たまに	ときどき ・しばしば	合計
専業主婦	43.9	37.7	18.5	100.0
自営・内職	49.6	27.9	22.5	100.0
パート	45.3	31.7	23.0	100.0
常勤	16.7	39.9	43.5	100.0

欠損値 = 2 自由度 6 $x^2=54.5$ $p<.001$

表25 ライフステージ別夫の「料理・あとかたづけ」(%)

	まったく	たまに	ときどき ・しばしば	合計
夫婦のみ	24.2	35.0	40.8	100.0
末子乳児	40.3	37.8	21.9	100.0
末子幼児	38.1	42.4	19.5	100.0
末子小学生	45.0	33.3	21.7	100.0
末子中学生以上	50.9	32.7	16.4	100.0

欠損値 = 2 自由度 8 $x^2=39.4$ $p<.001$

表26 妻の就労形態別 夫の「風呂の準備・掃除」(%)

	まったく	たまに	ときどき ・しばしば	合計
専業主婦	39.6	38.1	22.3	100.0
自営・内職	47.2	28.7	24.1	100.0
パート	45.2	30.4	24.4	100.0
常勤	22.1	28.7	49.3	100.0

n=788 自由度 6 $x^2=46.4$ $p<.001$

表27 ライフステージ別 夫の「風呂の準備・掃除」(%)

	まったく	たまに	ときどき ・しばしば	合計
夫婦のみ	23.0	26.3	50.7	100.0
末子乳児	35.0	35.5	29.4	100.0
末子幼児	34.8	38.1	27.1	100.0
末子小学生	48.9	36.2	14.9	100.0
末子中学生以上	50.9	32.4	16.7	100.0

n=788 自由度 8 $\chi^2=68.0$ p<.001

るが、他の就労形態をとる妻をもつ夫よりは非常に多かった(表28： $\chi^2=74.6$ 自由度 6 p<.001)。

夫婦のみの世帯で「洗濯」をときどきあるいはしばしば行う夫は16.6%、それ以外のライフステージの世帯では8割前後の夫が全く行っていないという違いがみられる(表29： $\chi^2=46.5$ 自由度 8 p<.001)。

「掃除」に関しては専業主婦の妻の世帯では夫の参加は8.9%であるが、常勤の妻の世帯では少

表28 妻の就労形態別 夫の「洗濯」(%)

	まったく	たまに	ときどき ・しばしば	合計
専業主婦	80.6	15.6	3.8	100.0
自営・内職	80.0	14.6	5.5	100.0
パート	81.2	10.9	8.0	100.0
常勤	49.6	27.7	23.7	100.0

欠損値=5 自由度 6 $\chi^2=74.6$ p<.001

表29 ライフステージ別 夫の「洗濯」(%)

	まったく	たまに	ときどき ・しばしば	合計
夫婦のみ	55.4	28.0	16.6	100.0
末子乳児	78.1	14.9	7.0	100.0
末子幼児	73.7	18.6	7.6	100.0
末子小学生	82.0	12.9	5.1	100.0
末子中学生以上	85.3	11.0	3.7	100.0

欠損値=5 自由度 8 $\chi^2=46.5$ p<.001

表30 妻の就労形態別 夫の「掃除」(%)

	まったく	たまに	ときどき ・しばしば	合計
専業主婦	61.5	29.6	8.9	100.0
自営・内職	54.1	35.8	10.1	100.0
パート	61.2	25.9	13.0	100.0
常勤	36.2	34.8	29.0	100.0

欠損値=5 自由度 6 $\chi^2=48.2$ p<.001

ないながらも、29.0%の夫がときどきあるいはしばしば行っている(表30： $\chi^2=48.2$ 自由度 6 p<.001)。

夫婦のみの世帯で「掃除」をときどきあるいはしばしば行う夫は23.6%、傾向としては夫婦のみの世帯以外での夫の参加はきわめて少ない(表31： $\chi^2=23.5$ 自由度 8 p<.001)。

「ふとんのあげおろし」は自営・内職の妻の世帯の夫の参加が少なく、他の家事項目とは異なっているという点では他の項目とは際立った違いを示している。他方、妻が常勤である夫の参加が約半数を占め、他の世帯とは全く異なるという点では他の家事項目における夫の参加と同様の傾向がみられる(表32： $\chi^2=42.4$ 自由度 6 p<.001)。

ライフステージ別でみると、「ふとんのあげおろし」を行う夫は、夫婦のみの世帯で43.9%であるがそれ以外のライフステージの世帯では30%弱にとどまっている(表33： $\chi^2=24.5$ 自由度 8 p<.001)。

「ゴミだし」は妻が常勤の世帯では半数以上の

表31 ライフステージ別 夫の「掃除」(%)

	まったく	たまに	ときどき ・しばしば	合計
夫婦のみ	43.3	33.1	23.6	100.0
末子乳児	57.7	30.4	11.9	100.0
末子幼児	56.9	33.6	9.5	100.0
末子小学生	59.2	31.3	9.5	100.0
末子中学生以上	63.6	27.7	9.1	100.0

欠損値=5 自由度 8 $\chi^2=23.5$ p<.01

表32 妻の就労形態別 夫の「ふとんのあげおろし」(%)

	まったく	たまに	ときどき しばしば	合 計
専業主婦	42.1	31.8	26.1	100.0
自営・内職	59.4	22.9	17.7	100.0
パート	38.0	24.0	38.0	100.0
常勤	30.0	20.0	50.0	100.0

n=725 自由度 6 $x^2=42.4$ $p<.001$

表33 ライフステージ別 夫の「ふとんのあげおろし」(%)

	まったく	たまに	ときどき しばしば	合 計
夫婦のみ	34.6	21.5	43.9	100.0
末子乳児	37.7	36.6	25.7	100.0
末子幼児	40.3	25.7	33.9	100.0
末子小学生	42.5	27.0	30.5	100.0
末子中学生以上	53.6	19.6	26.8	100.0

n=725 自由度 8 $x^2=24.5$ $p<.001$

夫が、しばしばあるいはときどき行っているが、それ以外の世帯では20%強にとどまっている (表34: $x^2=54.4$ 自由度6 $p<.001$)。

ライフステージ別ではときどきあるいはしばしばゴミを出す夫は、夫婦のみの世帯49.3%、乳児のいる世帯36.2%、幼児のいる世帯23.7%、それ以外のステージでは2割を割っている (表35: $x^2=78.4$ 自由度8 $p<.001$)。

「子育て」に関しては妻の就労形態の違いにみられた傾向とは全く逆である。専業主婦の世帯ではしばしばあるいはときどき行っている夫が約

表34 妻の就労形態別 夫の「ゴミだし」(%)

	まったく	たまに	ときどき しばしば	合 計
専業主婦	50.5	24.0	25.5	100.0
自営・内職	52.8	25.9	21.3	100.0
パート	53.2	24.5	22.3	100.0
常勤	21.6	25.4	53.0	100.0

欠損値=14 自由度 6 $x^2=54.4$ $p<.001$

表35 ライフステージ別 夫の「ゴミだし」(%)

	まったく	たまに	ときどき しばしば	合 計
夫婦のみ	23.4	27.3	49.3	100.0
末子乳児	37.7	26.1	36.2	100.0
末子幼児	49.1	27.2	23.7	100.0
末子小学生	59.2	22.4	18.4	100.0
末子中学生以上	61.1	22.2	16.7	100.0

欠損値=14 自由度 8 $x^2=78.4$ $p<.001$

表36 妻の就労形態別 夫の「子育て」(%)

	まったく	たまに	ときどき しばしば	合 計
専業主婦	7.0	22.7	70.3	100.0
自営・内職	18.0	19.1	63.0	100.0
パート	23.2	30.6	46.3	100.0
常勤	13.6	27.2	59.3	100.0

n=648 自由度 6 $x^2=32.8$ $p<.001$

70%を占めるのに対し、常勤の世帯では約60%であった (表36: $x^2=32.8$ 自由度6 $p<.001$)。専業主婦の世帯の方が末子の年齢は低いことが反映しているものと考えられる。

ライフステージ別夫の「子育て」の参加をみると、乳幼児のいる世帯で約80%、末子が小学生の世帯で6割をわっている。子供の成長とともに育児は減少し、末子が中学生ともなると30%程度である (表37: $x^2=125.7$ 自由度6 $p<.001$)。

夫婦のみの場合、妻である回答者が常勤であることが多いこともあり、夫の家事分担は他と較べ

表37 ライフステージ別 夫の「子育て」(%)

	まったく	たまに	ときどき しばしば	合 計
末子乳児	2.0	17.9	80.1	100.0
末子幼児	6.8	13.6	79.7	100.0
末子小学生	12.2	33.9	53.9	100.0
末子中学生以上	37.3	30.0	32.7	100.0

n=648 自由度 6 $x^2=125.7$ $p<.001$

て多い。しかし子供ができて妻が専業主婦になった世帯では、育児が多大な労働力を必要とするにもかかわらず、夫の家事分担は極端に少なく、その後のライフステージの世帯において妻が就労している場合も夫の家事分担は多くはない。

(3) 世帯全体の家事遂行と妻の家事意識および社会的役割の主観的重要性

家事労働は家族生活の維持のために必要であるという実質的な有用性に加えて、なんらかの主観的な意味づけを与えている女性もいる。愛情の表出として、主婦のプライドとして、主婦の義務としての3項目についてたずねた(表38)。

「愛情をこめてしている」については「あてはまる」とした者が19.6%、「ややあてはまる」50.1%、「あまりあてはまらない」25.0%、「あてはまらない」5.4%であった。

「主婦としてのプライドをもってしている」については「あてはまる」とした者が14.6%、「ややあてはまる」31.9%、「あまりあてはまらない」34.5%、「あてはまらない」19.0%であった。

「主婦の義務としている」については「あてはまる」とした者が40.9%、「ややあてはまる」38.8%、「あまりあてはまらない」13.1%、「あてはまらない」7.2%であり、この項目が家事意識の3つの項目の中であてはまるとしたものが最も多い。

家事意識と家事遂行の関係では、愛情をこめて家事を行うと考えるほど、掃除・洗濯の頻度が多く(相関係数 $r=.16$, $p<.001$, $r=.10$, $p<.01$)、できあいの惣菜の利用は少ない($r=-.11$, $p<.01$)。主婦としてのプライドをもって行うと考えるものほど、また義務として考えるものほど掃除の頻度は多く($r=.13$, $p<.001$, $r=.13$, $p<.001$)、

洗濯の頻度も多い($r=.13$, $p<.001$, $r=.16$, $p<.001$)。掃除・洗濯は家事における意味づけが料理とは異なり、家事の中でも愛情と結びつけて考えられやすい家事項目であると思われる。

次に、社会的役割の主観的重要性と家事遂行および家事意識との関係を検討する。一般に、個人が担う社会的役割はきわめて多様であるが、本調査では家族内の役割として母親、妻、主婦を、親族との関係では自分の親に対する子、そして配偶者の親に対する嫁に限定する。さらに家族外の社会関係では職業人、および他の社会活動でのメンバーシップという役割にしばって主観的重要性をたずねることにした。

「あなたは、様々な社会的な立場をおもちであると思います。そのそれぞれの立場は、現在のあなたにとってどのくらい重要でしょうか。以下のそれぞれの社会的立場について、あなたにもっともあてはまる番号に○をつけてください。」の質問に対し、「子供に対して母親であること(以下では母と省略)」、「夫に対して妻であること(以下では「妻」)」、「自分の親に対して子であること(以下では「子」)」、「夫の親に対して嫁であること(以下では「嫁」)」、「一家の主婦であること(以下では「主婦」)」、「職業人であること(以下では「職業人」)」、「活動団体のメンバーであること」の7項目を設定した。その上で回答者自身は個々の役割を自分にとってどの程度重要であると考えているかを「あまり重要ではない」から「非常に重要である」までの4段階で評価してもらった。

その結果、「母」役割を「非常に重要である」と考えているものが最も多く、「重要である」とあわせるとあてはまらない者(子のない者)を除けば、ほとんどの者が重要視していることになる。

表38 家事意識 (%)

	あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	合計
愛情をこめてしている	5.4	25.0	50.1	19.6	100.0
主婦としてのプライドをもってしている	19.0	34.5	31.9	14.6	100.0
主婦の義務としてしている	7.2	13.1	38.8	40.9	100.0

表39 社会的役割の自分にとっての重要度 (%)

	重要でない	あまり重要でない	どちらかといえば重要である	非常に重要	あてはまらない
子どもに対して母親であること	0.2	3.5	23.2	54.1	19.0
夫に対して妻であること	5.8	14.4	40.2	39.3	0.2
自分の親に対して子であること	10.3	22.1	43.1	22.6	2.0
夫の親に対して嫁であること	21.5	28.8	32.1	13.0	4.6
一家の主婦であること	10.5	19.4	41.8	27.5	0.9
職業人であること	12.7	11.2	15.2	8.2	52.6
活動団体のメンバーであること	37.0	24.7	13.1	5.0	20.1

ついで「妻」役割を重要視している者が多く、約80%を占めている(表39)。「主婦」役割を「非常に重要である」としている者は「母」、「妻」と比べると少ないが、「重要である」と考えている者とあわせると7割弱になる。「子」の役割を重要であると考えている者は、「嫁」役割の場合より多いことは、家制度的規範の衰退をうかがわせる。職業に就いている者の中では、「職業人」役割を重要視している者としていない者がほぼ半々に分れている。「活動団体メンバー」の役割を重要視している者は参加している者の中でも比較的少なかった。

7つの役割の中でどれが最も重要であるかをたずねたところ、「母」役割を最も重要であると回答するものが58.7%を占めていた。ついで「妻」を選んだものが24.0%を占め、「主婦」は9.9%、それ以外の者は非常に少なかった(表40)。

母役割を重要視している者は家事を義務としてとらえているものが多かった($r = .10, p < .05$)。家事遂行との関係でそれを確認できる。母役割の主観的重要性の認知は末子の年齢とも関係がある。すなわち末子の年齢が低い程、母役割は重要視される傾向にあり、それにとまって世帯で行われる家事の頻度も多くなっている($r = .13, p < .001, r = .10, p < .001$)。

妻役割を重要視する者の中には家事をプライドをもって行う者と、愛情をこめて行うとする者がいる(相関係数 $r = .17, p < .001, r = .28, p < .001$)。またこのグループに属する妻は家事遂行に関して、できあいの惣菜の利用は少ない(r

表40 もっとも大事な社会的役割 (%)

子どもに対して母親であること	58.7
夫に対して妻であること	24.0
自分の親に対して子であること	1.5
夫の親に対して子であること	0.9
一家の主婦であること	9.9
職業人であること	4.2
活動団体のメンバーであること	0.9
合計	100.0

$= -.10, p < .05$)。

主婦役割を重要視している者は家事を義務と考えもするし、愛情をこめてもいるし、プライドをもって行ってもいる($r = .20, p < .001, r = .31, p < .001, r = .28, p < .001$)。家事遂行においても掃除、洗濯は頻繁に行う傾向がある($r = .16, p < .001, r = .22, p < .001$)。しかし惣菜の利用や冷凍食品の利用とは関連が認められない。

「子」役割を重要視している者は、家事を愛情をもって行う、あるいはプライドをもって行う傾向があった($r = .17, p < .001, r = .15, p < .001$)。しかし自分の親と同居している者が少ないためか、実際の家事遂行とは結びついていない。

「嫁」役割を重要視している者も「子」役割を重要視している場合と同様、実際の家事遂行との関係は見られなかったが、愛情をもち、プライドをもち、あるいは義務として行っている者が多かった($r = .16, p < .001, r = .14, p < .001, r = .20, p < .001$)。

職業人や活動団体のメンバーの役割のような家

庭外の役割を重要視するか否かは家事意識や家事遂行との関係はみられなかった。

この調査においては世帯において行われる家事項目として扱ったのは料理・洗濯・掃除だけであったが、その中では4節で述べたように料理において、他の家事項目との違いがあらわれていた。役割の主観的重要性との関係でも、「妻」役割を重要視している者は料理は外部化しない、言い換えれば手間をかけている。

全体的には家族内の役割を重要視しているものは家事の頻度が高く、家事への意味づけにおいて愛情やプライドから説明される傾向があるが、家族外の役割を重要視していても、家事遂行や家事に対する意味付けに影響を与えない。つまり、社会活動や職業活動における役割を重要視していても、家族内の役割も重要視していれば、家事に手を抜かないのであろう。また、表39にみられたように最も重要な役割については、「母」、「妻」のような家族内の役割を選ぶ者がほとんどであった。たとえ家族外の役割を重要視していても、家族内の役割をより重要視している者が多いことを示している。

4. 考 察

4章では分析結果をもとに現代女性像について検討する。家庭と仕事は両立させたいと考える女性は少なくないといわれているが、実際には育児期に多くの女性は専業主婦になり、育児期が終わってもパートなどで働くことがほとんどである。

今回の調査は1時点のものであり、女性の経歴を示しているとはいえないが、子供の出産による夫婦関係の変化があるのではないかと推測される。夫婦のみのライフステージの場合、共働きの夫婦も他のライフステージに較べて多く、また世帯で行われる家事の頻度は少ない。しかしその中では夫の家事分担は他のライフステージに較べて多く、現代的と考えられる対等な夫婦の姿がうかがえる。しかし子供が生まれた時点から、家族の姿は全く異なっている。妊娠・出産によって妻が

専業主婦となって以後は、夫の家事分担は激減する。子供が手のかからなくなった後、妻はパートなどで勤めるが、夫の家事分担は増加しない。今回の調査の回答者においても末子が乳児のライフステージから圧倒的に専業主婦の割合が増え、その後も妻が常勤の者はあまり増加しない。これらのことから、子供が生まれて以後の家族生活の変化は、妻が勤めをやめることをきっかけに、協同型から分業型の夫婦関係にかわるといえるのだろうか。あるいは若い世代においては協同型が多くなってきているのであろうか。これらの判断は1時点の調査では困難であるが、おそらくこれらの仮説はどちらもあてはまると考える。しかし、分業型から協同型へ変えるほど、夫婦のみの世帯と末子が小学生の世帯との世代差が大きいと考えるににくい。したがって、ライフステージによって夫婦関係が変化する仮説のほうが、よりあてはまるのではないかと考える。

家事の担い手である妻の様々な家事意識の違い、また本人が重要視する役割の違いと家事遂行は関係していると推測される。妻であることを重要視している場合には家事を愛情と考え、できあいの惣菜を利用せず、手作りを心掛けているようである。また家庭内の役割を重要視しているものは家事の頻度が高かった。

就業していなくても多くの回答者はなんらかの社会活動を行っているが、そのメンバーとしての役割は回答者にとってあまり重要視されていない。これらの意味するところは、子供ができることによって女性が職業から切り離され、依然として家族内役割にとじ込められる、あるいはその中で意味を見いだそうとするこれまでの主婦イメージを継承しているように思われるが、さらなる詳細な分析は今後の検討課題である。

本稿は回答者および配偶者の属性や役割と家事の実態とのおおよその関係を示したにすぎない。今後さらに精緻化した仮説の提示と分析を進める必要がある。具体的には夫の職業や学歴、妻の職種や学歴、夫婦の伴侶性など夫婦関係についての意識等を組み入れた分析を他の共同研究者とともに行う予定である。さらに回答者が生じているか

もしれないストレスとその要因、回答者を支えるネットワークについても着目して分析を進める。

付 記

本研究は東京都立大学都市研究センターにおける共同研究「大都市の地域経済構造の変化に対応した環境の保全創造に関する総合的研究」の一環

として実施されたものである。共同研究者として参加した、藤崎宏子（聖心女子大学）、野沢慎司（静岡大学）、稲葉昭英（淑徳大学）の諸氏に多くを負っていることを記して謝意を表します。

参 考 文 献

調布市企画調整部企画課（1994）『調布市統計書（平成5年版）』

Key Words (キーワード)

View of Household Labor（家事意識）、**Division of Household Labor**（家事分担）、**Subjective Importance of Social Roles**（社会的役割の主観的重要性）

The Married Women's View and Accomplishment of Household Labor in Urban Area : Survey of Contemporary Women's Life Stress and Network

Akiko Nagai*, Kunio Ishihara**

*Graduate Student, Tokyo Metropolitan University

**Faculty of Social Sciences and Humanities, Tokyo Metropolitan University

Comprehensive Urban Studies, No.53, 1994, pp.123-139

Focusing on the life stress and social network in earlier life stages or married women, a mail survey was conducted at Chofu-City, in the suburbs of Tokyo, in December of 1993. We selected area probability sample of married women aged from 25 to 44, with a response rate of 50% (effective sample size of 822). This article is the first preliminary report of the research project.

In our respondents, many wives have with children and scarcely have a full-time job outside the home. Couples without children accomplish household labor less than those couples with children. However, younger husbands without children rather share more housework than those who have children. It suggests that their relationship between a wife and a husband has become more egalitarian. After pregnancy or birth of a child, many women choose to become a full-time housewife. On the stage where they have infants at, many husbands tend to participate child care/rearing, although the degree of participation depends on the individual. But they scarcely perform other types of household labor.

Wives who commit themselves to the wife role, are likely to do the housework with more affection, while they scarcely use any ready made dishes. Wives who attach importance to the mother role are likely to regard it as their obligation, and they accomplish household labor more than others. On the other side, wives who commit themselves to the role of a housewife tend to regard the household labor as their obligation, and they try to accomplish household labor with much affection and pride.

In sum, nowadays, the presence of children separates many wives from market labor, while changing the relations between marriage partners.